

大腸CT検査で前処置から検査まで 受診者にやさしい検診に!

— 大腸検査食クリアスルーの活用レポート —



大腸CT検査の前処置法に大腸内視鏡専用検査食として開発されたクリアスルーをご使用いただき、その使用感について松本友寛院長先生に語っていただいた。

松本外科・胃腸内科医院
院長
松本 友寛 先生

《プロフィール》
2002年 防衛医科大学校 卒業
2006年 兵庫医科大学 第二外科 病院助手
2009年 兵庫医科大学 上部消化管外科 助教
2013年 医療法人佳生会 野木病院 外科
2015年 松本外科・胃腸内科医院 開院

日本外科学会専門医
日本消化器内視鏡学会専門医
日本消化器病学会専門医
日本がん治療認定医機構認定医
医学博士

はじめに

大腸がん患者が増えている。2015年の罹患数はついに胃がんを抜いて1位、がんの死亡数も胃がんを抜いて肺がんに次いで2位になった。実際に検査を行っていて感じることは、ポリープなどの大腸病変が見つかる患者さんがとにかく多く、今後はより一層定期的な大腸検査が求められるようになってきている。

大腸CT検査のメリットは 短い検査時間と少ない苦痛

大腸CT検査は平成24年の診療報酬改定時に大腸CT検査が保険収載された。

大腸内視鏡検査よりも短時間(15分程度)で検査でき、検査中の苦痛もほとんど認められないことから、今後増えてくる検査方法だと思われる。

大腸CT検査では、大腸のひだの裏側まで観察でき、通常CT画像によって腸管外の情報も得ることができる。

ただし、病変の色、硬さなどの情報を得ることはできず平坦な病変の検査には弱い面もある。また、検査で問題が見つかった時には組織採取ができないため、改めて大腸内視鏡検査が必要になるなどのデメリットもある(表1)。

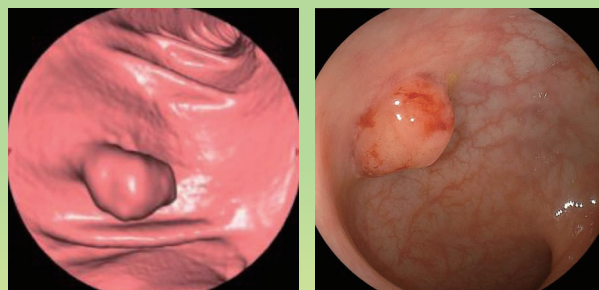
大腸内視鏡検査をする場合にも 大腸CT検査で得た情報を活用

以前、検査で異常を指摘され、自覚症状がある患者さんには大腸内視鏡検査を勧めるが、そうではない患者さん(例えば便潜血が2回のうち1回陽性であった場合など)には大腸CT検査も選択肢として挙げられるとお話している。以前、大腸内視鏡検査で苦痛があった、あるいは辛かった患者さんにも最初は大腸CT検査での検査をお勧めする。もし、大腸CT検査で異常所見が疑われて大腸内視鏡検査を実施することになっても、異常所見が疑われた部位が特定できていれば、全大腸内視鏡検査は必要ではないし(部位によってはS状結腸までの検査)、患者さんの大腸の立体的な特徴がわかっているならば、苦痛を与えないように内視鏡を操作することもできる。また、S状結腸までの検査であれば腸管洗浄剤の使用量も少なく済むかもしれない(図1)。

表1 大腸CT検査と大腸内視鏡検査の比較

	大腸CT検査	大腸内視鏡検査
長所	<ul style="list-style-type: none"> ●検査時間が短い ●検査中の苦痛が少ない ●大腸のひだの裏側も観察できる ●腸管外の情報も同時に取得可能 ●注腸検査や内視鏡検査が困難な患者にも施行可能 ●術者の技能が検査の質に影響しない ●診断画像に客観性・再現性がある ●偶発症が極めてまれである 	<ul style="list-style-type: none"> ●粘膜面の色の変化を観察できる ●組織の採取、ポリープの切除などができる
短所	<ul style="list-style-type: none"> ●組織の採取ができない ●粘膜面や病変の色・硬さの情報が得られないため、平坦な病変は検出しにくい ●病変が見つかった場合には内視鏡検査が必要 ●放射線による被曝 	<ul style="list-style-type: none"> ●内視鏡挿入時など、苦痛がある場合がある ●大腸のひだの裏側が見えにくいことがある ●狭窄部位があれば、その部位より奥は観察できない

図1 大腸CT画像と大腸内視鏡画像の比較



大腸CT画像

大腸内視鏡画像

